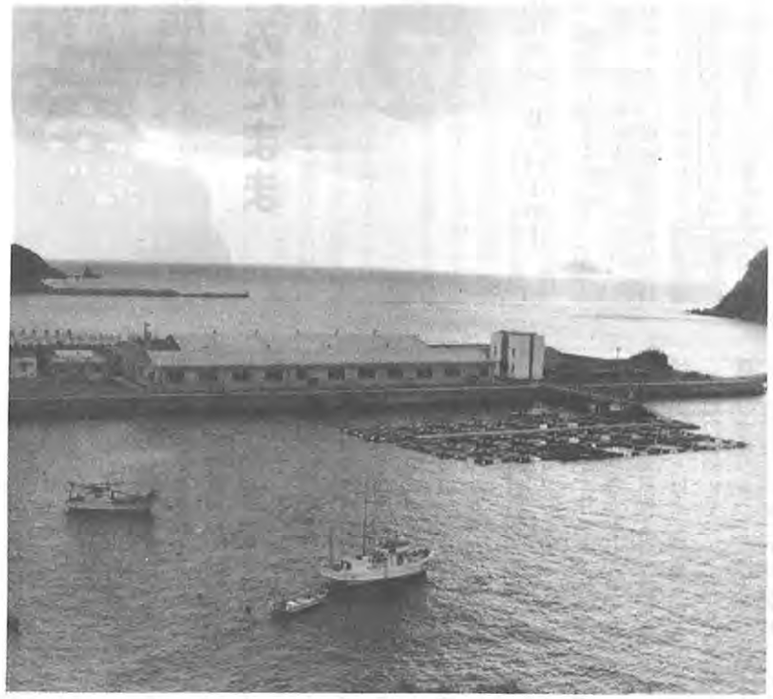
施設紹介

栽培漁業センター



熊本県栽培漁業センターは、昭和五十三年四月、牛深市牛深町に開設された。高く架けられた赤色の通天橋を渡り、下須島入口の公園から西方眼下に見える、一見工場風の建物がそれである。

日本の漁業が海外漁場での操業に厳しい制約を受けることになり、沿岸漁場の再開発を要請される中で、県は、「栽培漁業の推進」を沿岸漁業振興策の重点指針として掲げ、いわゆる「つくる漁業」を目指して、「漁場づくり」と「魚づくり」に取組んでいる。当センターは、水産資源を積極的に増やす「魚づくり」の最も基幹となる魚・貝類の種苗生産を目的として設置されたものであり、稚魚や稚貝を人工的に大量生産し、放流用、或は養殖用の種苗として配布することを任務としている。

牛深市から提供された一万七千平方メートル余りの敷地に、四億八千万円をかけて設置された施設は、親魚産卵水槽（円型一〇〇トン二面）、ふ化飼育棟（一〇〇トン水槽一〇面）、孵魚の初期の餌となるワムシ培養棟（五〇トン水槽一六面）、ワムシの餌となるクロレラ培養水槽（二〇〇トン水槽四面）、アワビ飼育池（二〇トン二〇面）を軸として管理棟その他の附帯設備から構成されている。

現在県が生産している海産魚介人工種苗七種のうちここでは、マダイ、ヒラメ、イシダイ、アワビの四種を手がけており、クルマエビ、ヨシエビ、ガザミを水産試験場大矢野支場が生産している。開設以来現在まで生産配布した種苗は、マダイ二百八十万尾、ヒラメ五十一万尾、イシダイ二十一万尾、アワビ四十五万個に及んでおり、更に今年度中にヒラメ四十万尾、アワビ五十万個を生産する計画である。又、昭和五十六年度には、マダイ二百万尾、ヒラメ四十万尾、イシダイ二十万尾、アワビ六十万個の生産を目標としている。

生産した種苗は稚魚の保護育成管理が伴ってこそ所期の効果を十分にあげられるものであり、一般の認識と協力が切に望まれるところである。

自然や環境の諸々の条件に微妙な影響を受け易い魚貝を対象とする種苗生産は、特に細心の注意と不断の管理を要し、技術的にもなお開発の余地が残されているが、更に健全種苗の安定生産を図るため、又有用魚資源の一層の増大に必要な対象魚種の拡大について研究を重ねている。

この人と30分

このコーナーは県出身者で各界で活躍しておられる方々を紹介するとともに、県政への提言などをお聞きするものです。

ふるさとは我が心の標（しるべ）

作曲家　岩代浩一

講演のため来熊中の、作曲家岩代浩一氏（阿蘇郡白水村中松出身）を、熊本市内のホテルに訪ねた。

〝いつも故郷を想い、語り、たたえ、そして、どんなときも故郷を忘れない。〟という氏の郷土愛の精神を聞き感動した。

昭和五年八月二十三日、阿蘇郡一の宮町宮地に生まれる。旧制大津中学、九州学院を経て、熊本大学教育学部卒。

昭和二十六年四月から二十八年三月まで、熊本市内の京陵中学校に音楽教師（志望は国語教師）として勤める。二十八年四月、「好きな道を自由に生きる事が何よりの幸福である。」という厳父の訓辞に意を決し上京、三十一年まで、松本民之助芸大教授に、和声楽・対位法（旋律対旋律の学問）・作曲法を学び、また、昭和三十二年より三十四年まで、島岡譲芸大教授がパリより帰朝されるや、フランス系作曲技法を学ぶ。立体音楽堂（NHKラジオ、N響によるホップス）の編曲を皮切りに歌の広場・若い民謡（NHKテレビ）を手がけ放送音楽、劇場音楽、レコーディング等の作曲・編曲に活躍中。

作品に、県民の愛唱歌となっている「火の国旅情」をはじめ、「火の国の祭り歌」「夕陽よ恋よ故郷よ」外多数。今、一月二月の帝国劇場公演「華麗なる遺産」（出演—森繁久弥・山田五十鈴等）の音楽制作に励んでいる。

現住所　東京都世田ケ谷区頼田一—三〇—三一—四〇二

阿蘇南郷谷出身

阿蘇郡一の宮町宮地の母親の実家で生まれ、幼児期は人吉市で育ちました。といいますのが父の仕事の関係です。父は、東京高等師範学校を卒業すると、最初の赴任校が人吉中学だったためです。国漢の教師をしていました。

父は、南郷の白水村中松の出身です。祖先がいつの時代に、阿蘇に来たのかわかりません。豪族みたいでした。祖父も漢学者で、郡会議員もやりました。とにかく根っからの阿蘇人です。

ふるさとへの想い

小学校は、父の転勤の関係で大阪の小学校を卒業しました。入学の年（昭和十二年）に支那事変が始まり、頻繁に行われる提灯行列では「見よ東海の空明けて……」と歌って歩いたことを覚えています。

父が国漢の教師であったためか、音楽より俳句や漢文が好きでした。小学六年で「孝経」を暗記しました。また、「孝経」や「平家物語」を独得の節づけで音読するのがたまらなく気持ちよかったですね。

熊本を意識しだしたのは、小学校のときです。夏休み、冬休みになると阿蘇の白水に帰るんですよ。そして、川をせき止めて、小ブナやどじょうを取ったり、みんなで素足でかけめぐったり、阿蘇の水のつめたかったことなど、阿蘇の大自然との遊びがたくさん思い出せます。こういうことで、帰郷するたびにふるさと